WOODTEC

本物の木と暮らそう

cue

12

WOODTEC 朝日ウッドテック株式会社
〒541-0054 大阪市中央区南本町4-5-10 TEL.06-6245-9505 発行／令和6年8月31日

床の記憶
MESSAGE FROM FLOORS.

52

子供の頃の夏休みの一番の楽しみは、
従兄弟と田舎のおばあちゃん家にとまりに行くこと。

遊んで笑っていくら夜更かししても怒られないのが
嬉しかった。

川に泳ぎに行ったあとは広縁にドッところがりこむ。

火照った体を木の床にピタッとくっつけて
お昼寝するのが気持ちよかったな〜。

熟睡して目覚めたらほっぺに床の溝の跡がクッキリ!!
互いにしましまになった顔を見合って大笑いしました。

Milano Design Week 2024

行ってきました！
ミラノデザインウィーク2024

特集！

世界中のインテリアや建築のプロフェッショナルから注目を集める、世界最大のデザインの祭典「ミラノデザインウィーク」。コロナ禍明けとなった今年、朝日ウッドテックからも5年ぶりに現地視察に行ってきました。

私たちが視察に行く目的は、「最新のインテリアトレンド調査」や「新しい商品開発に繋がるネタ・アイディア探し」です。木質建材メーカーならではの視点で、プロダクトの色や素材、仕上げといったデザイントレンドはもちろん、世界のトップブランドが発表する新作家具や展示空間から、これからのインテリアの潮流を肌で感じ取ります。

そんなミラノデザインウィーク視察に、マーケティング部若手メンバーとして初めて参加させて頂きました。世界最大の祭典のとにかく巨大な規模に圧倒されながらも、5年前から大きく変化したミラノの様子を感じることができました、

今回の特集では、最新のインテリアトレンド・木質トレンドはもちろん、初めての視察で体験したミラノサローネやミラノの街の魅力も合わせてご紹介させていただければと思います！

（文／取材・山野）

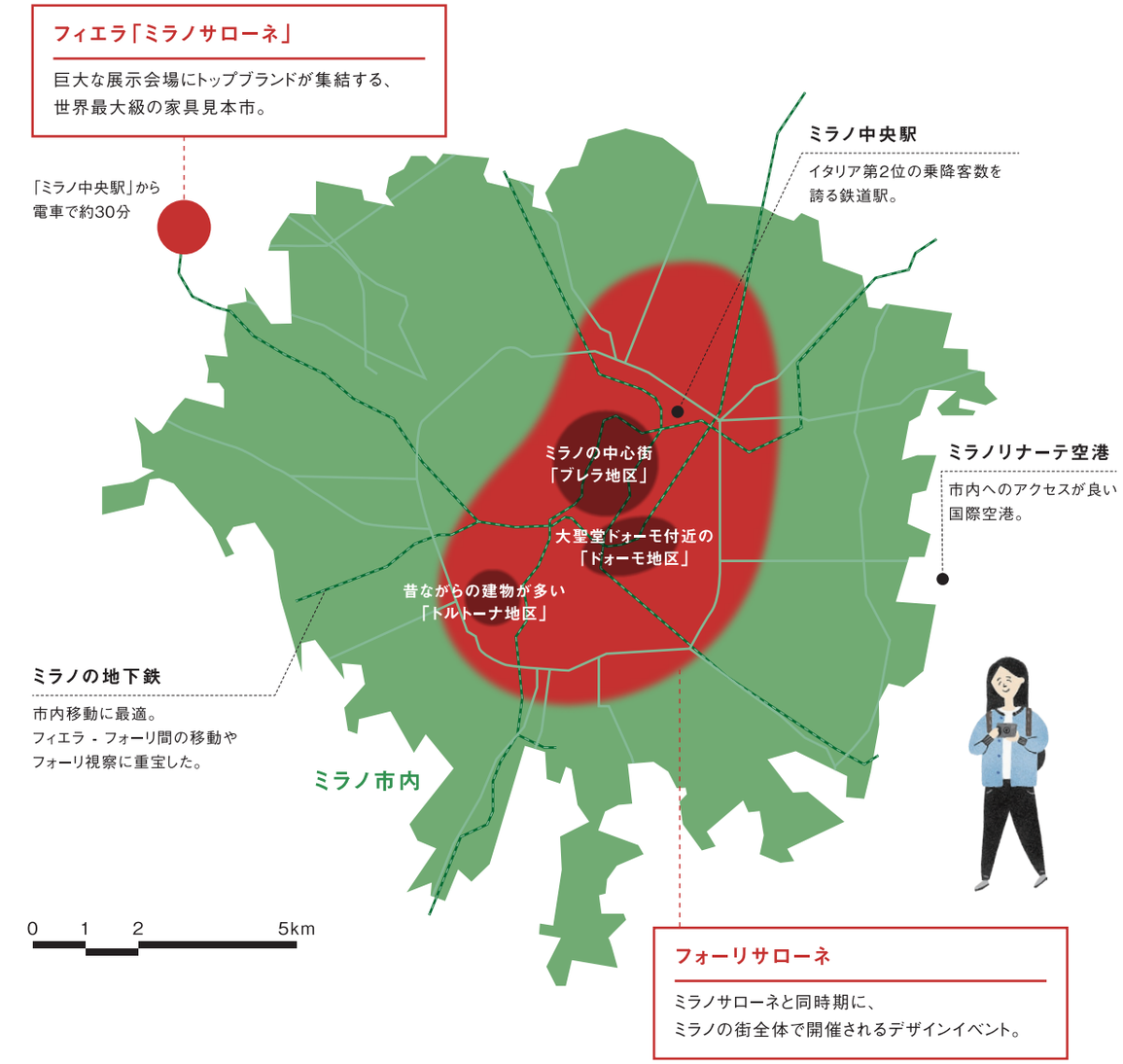
ミラノ中央駅での1枚。駅舎には見えない、大聖堂と思うような美しい駅でした。ミラノデザインウィーク期間中は、入口に山のモニュメントが設置されていました。

ミラノデザインウィークとは？

初めてのミラノデザインウィークでは、とにかくその規模の大きさ、来場者・出展者の熱量に驚かされました！よくご存知の方も多いと思いますが、はじめにミラノデザインウィークの全体像をご紹介させていただきます。

「ミラノデザインウィーク」とは、メイン会場となる「ロー・フィエラミラノ（Fiera Milano, Rho）」で毎年4月に開催される「ミラノサローネ」と、同時期にミラノ市内で開催される「フォーリサローネ」を総称したイベントです。両イベントを合わせて100万人規模の来場者が訪れる巨大なイベントなんです。

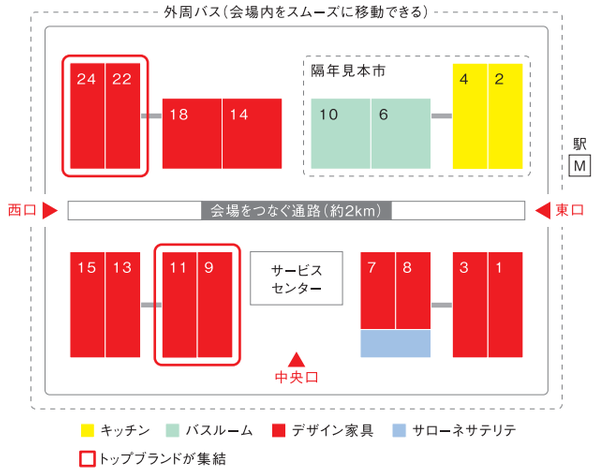
Salone del Mobile Milano



フィエラ「ミラノサローネ」

今年で62回目の開催を迎えた世界最大規模の家具見本市。2024年の出展企業数は1950（サローネサテリテのデザイナーを含む）、来場者数はコロナ禍前に迫る37万824人（前年比20・2%増）。その歴史は1961年、イタリア家具やインテリア小物の輸出、促進を目的として誕生した見本市からはじまる。その後、隔年見本市会場や若手デザイナーによる展示会場「サローネサテリテ*」などが設けられ徐々に規模が拡大。現在では世界中のトップブランドが集結し、その年の最新インテリアトレンドやこれからの潮流を、ブランドの垣根を越えて肌で感じられることが魅力。

*サローネサテリテ…若手デザイナーによる展示コーナー。国際的若手デザイナーの登竜門ともいわれ、日本を代表するデザイナー佐藤オオキ氏も、サテリテへの出展をきっかけにその名が知られるようになった。



会場内には全長約2㎞の通路があり、その両側に展示会場となる巨大な建屋が並ぶ。各建屋は大きく4エリアに分かれていて、隔年見本市では「キッチン」と「照明」の展示が交互に開催される。朝日ウッドテックではトップブランドが多く出展するエリア中心に視察している。

「フォーリサローネ」

ミラノサローネと同時期に、ミラノ市内のショールームや特設会場を使って行われる新作発表、インスタレーションなどのイベント。フォーリサローネは「サローネの外」という意味。インテリアブランドだけでなく、世界的なファッションブランドや自動車メーカー、IT企業などの出展も年々増えており、2024年は600を超えるイベントが開催された。ミラノの街の雰囲気と合わせて、各ブランドが作り出す世界観を楽しめる。

開催前日から盛り上がりを見せる「ミラノデザインウィーク」

大阪から飛行機を乗り継いで約20時間。初めてのミラノには、開催前日の夜10時に到着しました。空港からホテルへの移動中に驚いたのが、1軒のバーに集まる人だかり。よっぽど人気のバーなのかと思っていると、ガイドさんから「これはBar Bassoという人気のバーなんですが、この人の多さはおそらくミラノサローネの前夜祭をしていますね。」というアナウンスが。夜の11時近くにもかかわらず道路にはみ出るほどの人が集まっており、開催前日からミラノデザインウィークの来場者の多さと熱気に圧倒されました。

いよいよ視察開始！デザインの街ミラノの歴史を感じながら会場へ

まずはフィエラ会場で行われるミラノサローネへ向かいます。会場までは電車で約30分の距離ですが、初日だけバス移動することができたため窓からミラノの街並みを楽しむことができました。

古くからデザイン、ファッションの街として知られるミラノには、伝統的な石造りの建物が多く残っていますが、最近では高層ビルが立ち並ぶ再開発エリアが発達しているそうで、歴史的建造物と最新の建造物が混在した街並みに驚きました！中でも、「垂直の森」という名の2棟のレジデンスタワーには、四方に張り出すテラスに800本を超える木が生育されていて、遠くからでも存在感を放っていました。その他にも、巨匠建築家のザハ・ハディド、磯崎新、ダニエル・リベスキンドによる3つのタワー等、新たな名建築が次々と生まれており、今も成長するミラノの街の活気を感じられました。

すべて回り切ることはほぼ不可能！規模の大きさに圧倒されたフィエラ会場

ミラノの街並みを眺めながら30分程移動すると、2005年に建設された現在のミラノサローネ会場「ロー・フィエラ」に到着です。

フィエラ会場は、20万㎡を超える展示スペースに2000社近くの企業やデザイナーが出展できる広さがあり、とにかく規模が大きいです。展示スペースの大きさがいまいちピンとこないかもしれないのですが、東京ドームに例えると約9個分の広さがあり、会場を繋ぐ通路を端まで歩くだけでなんと20分もかかります！期間内にすべてを見ることは不可能に近く、見たいものやテーマを絞り、事前に内覧予約をするなど効率的にまわるのがコツです。私たちも事前に計画を立て、可能な

ミラノ市内からのアクセスが良い「ミラノ・リナーテ空港」。開催前日の夜10時に到着。

ミラノ市内は伝統的な建物が多く路面電車が発達していました。最近は中心部で自動車の入場規制も始まったそうで、環境への取り組みも伺えます。

市内のバー「Bar Basso」で行われていたミラノサローネ前夜祭には、道路まであふれる人が集まっていました。

再開発エリアでひときわ目立っていたタワーマンション「垂直の森」。四方のテラスには800本を超える木が植えられているそう。

「フィエラ」会場のメインエントランス。入口で荷物チェックを受けて会場内へ。

開催初日のエントランスの様子。最新トレンドをいち早く見ようとたくさんの人が集まっていました。

会場内を繋ぐ全長約2㎞の通路。一直線に伸びていて、どこまで続いているのか終わりが全く見えません…。

限りのブランドを視察したところ、毎日2万歩以上、多い日には3万歩近く歩いていました！

そんなミラノサローネですが、今年のコンセプトは、「Where Design Evolves（デザインが進化する場所）」。来場者が疲れにくい会場レイアウトの見直しや、サスティナビリティ・ポリシーの進化等が実施されていました。特にサスティナビリティ・ポリシーについては、再利用不可能な材料の使用が禁止されるなど、持続可能な見本市を目指して厳しい基準が設けられているようでした。

各ブランドの展示ブースは一般的にイメージする展示会とは違って、床から壁・天井までしっかり作りこまれており、それぞれのブースがまるで1つの大きなショールームのようでした。その中にたくさんのインテリアシーンの展示があり、最新のインテリアカラーや木質トレンドを視察することができました。

Molteni&Cのブース内観。床から天井まで作り込まれた空間が広がり、インテリアからエクステリアまで様々なシーンが提案されていました。

イタリアのトップブランドPoliformのブース外観。高さ4mはあるだろう巨大なブースで、連日大勢の来場者で賑わっていました。

トレンドのテラコッタ色がふんだんに使われた、イタリアの家具ブランドbaxterのブース。

アウトドアブランドRODAは、昨年と同じ床・壁・天井を使用することでサステナブルな空間を展示。

知っておきたい!ミラノデザインウィーク出展ブランド6選

今回特に目立っていたブランドをご紹介します。

Poliform（ポリフォーム）

1970年イタリア創業。毎年ミラノサローネのメイン会場に出展し、最大規模のブースで入場規制もかかるほど人気の家具ブランド。すっきりした佇まいと良質な素材を使ったシステム収納やキッチン製品が人気。

FLEXFORM（フレックスフォルム）

1959年イタリア創業。イタリアデザインの巨匠アントニオ・チッテリオが総合監修をつとめるラグジュアリー家具ブランド。上質な皮革やクッションを使い、重厚感がありつつもスタイリッシュな製品が特長。

FLOS（フロス）

1962年イタリア創業の照明ブランド。オブジェとしても存在感を放つ独創的なデザインが特徴。ARCO・IC-LIGHTS・GLO-BALLは数ある作品の中でも特に評価が高い。

Boffi（ボッフィ）

1934年イタリア創業。キッチン・水回りのハイエンドブランドとして世界的な地位を築く家具ブランド。直線的でシャープなデザインや、ミニマルモダンなキッチンが人気。

KARIMOKU（カリモク）

1940年日本創業。やさしい肌触りで温もりのある木製家具を主体とする家具ブランド。ミラノサローネにはこれまでに複数回出展。今年はフォーリサローネも含む計4カ所で展示を行い話題となっていた。

Ritzwell（リッツウェル）

1992年日本創業。職人の手しごとによるMade in Japanの家具づくりを貫くブランド。今年のミラノサローネではメイン会場に出展し、日本ならではの美意識が作り出す心地よい暮らしを再現し注目を集めていた。

サスティナビリティへの取り組みを訴求したArperの展示。新素材「ペーパーシェル」を使用した、循環型のものづくりを紹介していました。

会場内にはいくつかのカフェがあり、テラス席で昼食を取ることもできます。

会場で食べたカルボナーラ。見た目はシンプルですが美味しかった!

ペーパーシェル（29枚の木質シートを層にして天然樹脂で接着した新素材）を用いたArperの名作家具「Catifa Carta」

FLEXFORM（フレックスフォルム）

真っ白なカーテンで囲われた明るい空間を展示

展示ブースすべてを白いカーテンで覆ったデザインが印象的だった、イタリアのラグジュアリー家具ブランド「FLEXFORM」。日本でも人気の明るく穏やかな空間の印象を受けました。

展示家具の木材は主にオークとウォルナットでしたが、驚いたのはその仕上げ。一瞬、本当に塗装していないのかな？と疑ってしまうような、無塗装感仕上げだったのです。より自然の状態に近い木のあたたかみを感じられるので、ストレスフルな現代生活の中で、ほっと安心できるような魅力的な表現だと感じました。

ホワイト〜ブラウンカラーのアースカラーでまとめられたブース。日本でも人気の明るく穏やかな空間が提案されていました。

2大樹種「オーク」と「ウォルナット」が脚部分に使われたテーブル。ちなみに天板は異素材。

まるで無塗装かと思うような、自然の状態の木に近い、彩度の低い塗装仕上げが素敵でした。

Poliform（ポリフォーム）

定番オークではない、ブラック着色のエルム（ニレ）を採用

予約なしでは入場すらできない超人気イタリアブランドの「Poliform」では、1970年代をオマージュしたという空間展示で、空間を引き締める黒が多く使われているのが印象的でした。

ブース内の木材の多くも黒く着色されていたのですが、使われていたのは「エルム（ニレ）」。エルムはオークと似た環孔材の樹種です。定番オークの需要が急増する中、それ以外の樹種を使うことで個性を出したり、未利用材を活用していこうという意識があるように感じました。

1970年代をオマージュしたという空間。新しさの中に懐かしさを感じます。随所に空間を引き締めるブラックが使われていました。

ブラック着色の木材を使用したキャビネット。あらゆる家具にブラック着色の木材が使われていました。

使用木材は「エルム（ニレ）」。木目模様を綺麗に残した、絶妙な着色塗装技術が印象的でした。

KARIMOKU（カリモク）

日本の樹の美しさを表現

今年は市内も含め4ヶ所で展示を行っていた「KARIMOKU」。フィエラ会場では、日本らしい落ち着いた空間を提案していました。

中でも印象に残ったのがケヤキのダイニングテーブル。ケヤキは日本を代表する広葉樹ですが、和室の減少や生活様式の変化から需要が縮小しています。そんなケヤキを、木取りやデザインを工夫することで現代のスタイルに合う洗練されたデザインに生まれ変わせていたのです。今は需要が少ない樹でも工夫次第で魅力を引き出せるという、素晴らしい取り組みだと感じました。

ノームアーキテクツと芦沢啓治氏による展示ブース。どこか馴染み深さを感じる、日本らしい落ち着いた空間でした。

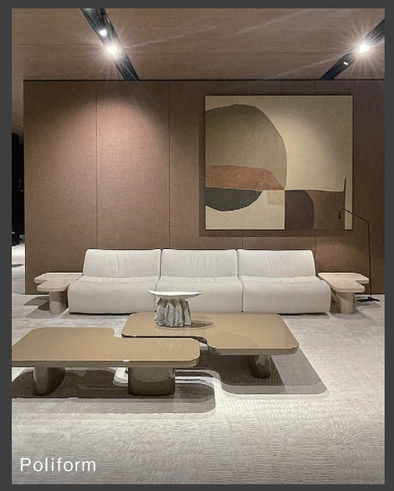
国産ケヤキのダイニングテーブル。生活様式の変化で需要が減少するケヤキの、新たな魅力を感じるテーブルでした。

ケヤキの板目材と柾目材を細かく継ぐことで、今のインテリアに合う洗練されたデザインに生まれ変わっていました。

アースカラーを中心にした低彩度カラーが継続 ブラックの占める面積が増加

Interior Color Trend

ベースカラーにホワイト、ベージュ、ブラウンといった彩度の低いアースカラーを使い、ブラックを効果的に配色するコーディネートが多く見られました。ブラックの占める面積が増加傾向にあり、ブラック着色の家具は各メーカーに必ず1つは展示されているのではと思う程多く見られました。また、ブラックフローリングを展示に採用しているメーカーも非常に多く見られました。穏やかなアースカラーのグラデーションで構成された空間から、ブラックとのコントラストがついた空間までブラックの使い方に各メーカーの個性が出ていたように感じます。差し色にはテラコッタ色やグリーン等が多く使われていました。


Poliform

FLEXFORM

MERIDIANI

B&B Italia

LIVING DIVANI

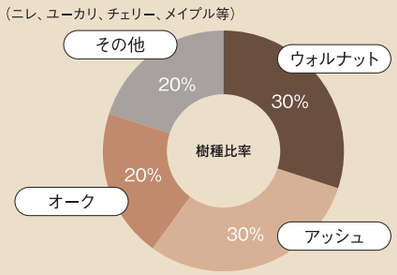
porada

baxter

人気樹種はウォルナットとアッシュ ブラック着色やインビジブルな仕上げが増加

Woody Trend

今年多かったのは「ウォルナット」と「アッシュ」。今まで慣れ親しんだ濃いウォルナットとは違う、明るく柔らかな色合いのウォルナットが多く見られました。またアッシュをはじめオークやエルム等の環孔材も多く、「ブラック着色」に仕上げられた家具が多く見られました。さらに今年多かったのが「インビジブル仕上げ」。インビジブルとは「目に見えない」「表に出てこない」等の意味。塗料が見えず、まるで無塗装のような柔らかな色合いの仕上げのことです。ウォルナット・アッシュ・オーク・チェリー等、多彩な樹種でインビジブルの表現が見られました。



柔らかな色合いのウォルナット

RIVA 1920

porada

LEMA

ブラック着色仕上げ

porro（アッシュ）

bonaldo（オーク）

Poliform（エルム）

インビジブル（無塗装感）仕上げ

FLEXFORM（ウォルナット）

moooi（アッシュ）

B&B Italia（オーク）

ミラノの街歩きが楽しい「フォーリサローネ」

フィエラ会場で最新トレンドを視察した後は、ミラノ市内で開催されている「フォーリサローネ」に向かいます。今年は市内の複数エリアで合計600以上のイベントが開催されており、家具ショールームが立ち並ぶ通りがある「ドォーモ地区」と、街の中心部にあたる「ブレラ地区」、デザイナーが多く出展する「トルトーナ地区」の3エリアを視察しました。

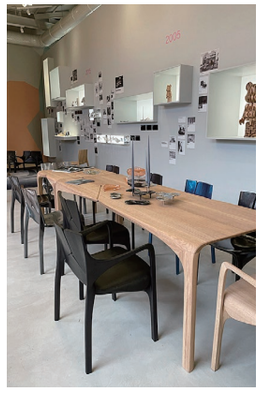
エリアによって街の雰囲気も違うので会場から会場までの移動時間も楽しく、また、ミラノの歴史的建造物を使ったインスタレーションやトークイベント等も多数開催されているので、フィエラ会場とは一味違うお祭り気分を楽しめました！

数あるイベントの中でも個人的に印象に残ったのは、イタリアの老舗照明ブランド「FLOS」。18世紀に建てられたヴィスコンティ宮殿を使って、FLOSを代表するIC-LIGHTSの10周年を記念したインスタレーションを行っており、鏡に反射するIC-LIGHTSの光や天井・壁面の絵画が、幻想的な空間を作り出していました！

その他にも、nendo×Paola Lentiの展示会場では、布の端切れをモチーフにしたスツールが発表されており、その周りには実際の端切れ布がカーテンのように吊るされたインスタレーションが。風が吹くと爽やかな青色の端切れが揺れる様子がとても綺麗でした。今回のミラノサローネでは、廃材料や廃材料から生み出した新素材を使用した製品を展示するブランドも多数あり、ヨーロッパではサスティナブルへの取り組みが当たり前になっている時代の流れを感じました。

ミラノを代表する大聖堂「ドォーモ」。約500年かけて完成された世界で2番目に大きな大聖堂で、135本立つ尖塔や彫刻の装飾が美しかったです。

ドォーモの東にある「ドゥリーニ通り」には、Cassina等高級インテリアブランドのショールームが集結します。



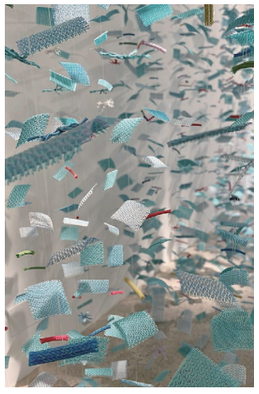
昔ながらの邸宅や倉庫、ギャラリーなどを使って、多数のデザイナーや大手企業のイベントが開催される「トルトーナ地区」。

街の中心部「ブレラ地区」には特にイベント・展示が集中します。至るところにデザインウィークの旗が掲げられていました。

18世紀に建てられたヴィスコンティ宮殿で、代表作「IC LIGHTS」10周年を記念する幻想的な展示を行ったFLOS。

ペンダントライトからフロア、テーブルライトなどさまざまな「IC LIGHTS」が展示されていました。

nendo×Paola Lentiによる新作「花嵐」。布の端切れが使われており、サスティナビリティへの取り組みが伺えました。



桜の舞い散る瞬間をモチーフにしたインスタレーション。端切れが風に揺れる様子が素敵でした!

キッチンは空間をデザインする重要アイテムへ

また、今年のミラノサローネ隔年見本市は「キッチン」の年。街中のフォーリサローネでも、複数のキッチンメーカーがイベントを開催していました。中でも行列を作っていたのが今年で90周年を迎えた水回りの世界的ブランド「Boffi」。展示会場の中に何点ものキッチン製品が展示されていましたが、料理をするための単なるキッチンではなく、空間をデザインする重要なアイテムとしてデザインされていることが分かりました。その中でも多かったのが、木のカウンターとの組み合わせ。キッチンなどの水回りにはあまり使われる印象のない木材ですが、より幅広い空間の中で使われるようになってきたことが実感できました。

Boffiの90周年を記念した展示会場は、連日大人気で多くの人が並んでいました。

アッシュ材を使った大判カウンターが印象的なキッチン。これまでキッチンには馴染が薄かった木材を使った表現が複数見られました。

ミラノ中央駅の内部。美術館のような内装が素敵で、ここから旅に出られると思うとワクワクしますね。

創業100年以上のマロングラッセの老舗「ジョヴァンニ・ガッリ」。大粒の栗が使われていてとても美味しくおすすめです!

石畳の道路に路面電車のレール、石造りの建物に囲まれたミラノの街はとても風情がありました。

ミラノ随一のデザインギャラリー兼セレクトショップ「ロッサーナ・オルランディ」。中にはカフェもあり多くの人で賑わっていました。

スーパーにずらりと並ぶオリーブオイル。同じくらいの規模のパスタ棚・トマトソース棚もありました。

ドォーモのすぐ隣にあるショッピングアーケード「ガレリア」。鉄とガラスが使われたドーム状の屋根が綺麗でした。

帰りの飛行機から見えたアルプス山脈とコモ湖。ミラノはイタリア北部、スイスに近い場所に位置するので街中からも綺麗な山脈が見えます。コモ湖は有名な別荘地で憧れの場所です!

初めての ミラノデザインウィークを 振り返って

実はミラノデザインウィークに来る前は、トレンド傾向を見つけられるのか?少し不安に思っていました。インテリアに限らず多様性が進む時代なので、各社で傾向は様々なのでは・・・?と。しかし、実際に行ってみたらそんな考えは吹き飛びました。1社1社のブースを回っているうちに、だんだん共通点が見えてくるのです。

今年の展示を見ていて感じたのは、人気のある樹種だけでなく、様々な樹の種類、表情を使った、新しい魅力的な表現が増えているということ。新たな樹種を採用したり、今まで使えなかった部材に着色を施したり、小さなピースを組み合わせたり・・・様々な工夫を施しつつも、木目や加工仕上げの美しさ、触り心地の良さを維持している所が、非常に勉強になりました。

これまでにもミラノデザインウィークの報告は聞いてきましたが、やはり現地でトップブランドが作り出す空間の中に入って実物を体感できた今回の経験は、大変貴重なものでした。今回の貴重な経験を活かし、これからの朝日ウッドテックのものづくりや情報発信に活かしていきたいと思います。

世界の床を訪れる4

ITALY

世界を知ることで見えてくる日本の床のあるべき姿があるのではないか。ということからスタートした「世界の床」を探求するプロジェクト。今回はイタリア ミラノにある歴史的建造物の床をご紹介します。職人技による造詣が非常に美しい床でした。

Palazzo Litta

リッタ宮

リッタ宮

母体は1640年代に、当時ミラノで最も影響力のあった一族、アレーゼ家の一員であるバルトロメオ アレーゼ伯爵のために建設された宮殿。のち18世紀にミラノ屈指の名家であるリッタ家の所有となり増改築が行われました。ちなみに、レオナルド・ダ・ヴィンチが描いたと言われる絵画『リッタの聖母』は、リッタ家が所有していたことからそのように呼ばれています。リッタ宮は重要な文化の中心地として、ここで長年にわたって盛大なパーティーが開催され、ナポレオンのミラノ到着時のレセプションもここで行われたそうです。

木質フローリングの歴史研究所の著者として知られるマリア・ルドヴィガ・ヴェルトーヴァさんが館を案内してくれました。

「文献では、紀元前6世紀頃のポーランドで木の床が確認できます。その後ドイツ、ノルウェーの教会などに使われており、特に北ヨーロッパ、東ヨーロッパで使われてきました。そのあと、イギリスのお城のギャラリー（廊下の広間）に使われ、徐々に新興勢力（ブルジョア）の邸宅にも使われていきました。

ヨーロッパの王侯貴族の館における木の床の流行は、フランス、ベルサイユ宮殿が始まりと考えられます。その実現には、高い技術を持つイタリアの職人たちが貢献しました。それ以前、ルネサンス期のイタリアで「エバニスタ」と呼ばれる木工職人による、緻密な象嵌装飾の収納家具などが流行し、その技術が床へ引き継がれたのです。」とマリアさんが木の床の歴史を語ってくれました。

インテリアの中で他のエレメントを生かすベースとなる時もあれば、華やかな主役にもなれる木の床。今回の旅で見た美しい象嵌デザインには木の床の可能性の大きさをあらためて感じることが出来ました。

（文／取材・西村）

リッタ宮を案内してくれた研究者のマリア・ルドヴィガ・ヴェルトーヴァさんと修復士のアントニオ・ラーヴァさん

マリアさんの著書「PAVIMENT LIGNEI IN EUROPA（ヨーロッパの木の床）」を見せていただきながらお話を伺いました。

リッタ宮の伯爵夫人の私室の床には、リッタ家の紋章のモチーフを中心とした装飾的なフローリングが貼られていた。

取材の日には床調査が行われていました。木工の修復師、アントニオ・ラーヴァさんは弟子と床に座り込み、木の粉を採取する。目視では判別できない樹種を粉から化学分析をして特定し修復を進めるとのこと。

レジデンス・リッタ

リッタ宮に隣接する集合住宅の空き部屋があったので中を見学しました。こちらの建物はインテリア界の巨匠、ミケーレ・デ・ルッキ氏が改修を手がけた建物です。床には手斧仕上げのオークのフローリングが貼られていました。

紹介しきれなかったごはん達。イタリアは本当に何を食べてもおいしく、毎日たくさん歩いた後のうれしいご褒美でした。個人的には、本場のピザが一番おいしかったです！

編集後記

最近、馬のかわいさにはまっています。先日初めて乗馬を体験したのですが、声掛けするとこちらに向く耳の動きが可愛く、とても癒されました。終わってみると足がガクガクになっていて、かなり体力を使っていることも実感。なかなか通うのは難しいですが、癒し＋体力作りになるスポーツでした！（山野）

神戸須磨シーワールドへ行ってきました。オープン（2024/6/1）したてなので休日はものすごい人らしいですが、平日に行ったので比較的ゆっくり観て廻ることができました。目玉のひとつ、シャチのショーは迫力満点でした。ちなみに隣接するシーワールドホテルの客室には弊社床材「MESSAGE Hotel（メッセージホテル）」が採用されています。遠方の方はぜひ宿泊込みで行ってみてください！（西村）

ポール・マッカートニーがビートルズ解散後に発表したソロアルバムの中で特にお勧めなのが1973年発売の『バンド・オン・ザ・ラン』です。このアルバムの収録曲でアルバムタイトル名にもなっている「バンド・オン・ザ・ラン」や「ジェット」は発表から50年経った今でもコンサートのセットリストには欠かす事が出来ない代表曲です。今回取り上げたリッケンバッカー4001のソリッドでタイトな音色も聴く事が出来ます。（相原）

写真はポール・マッカートニー&ウイングス／『バンド・オン・ザ・ラン』50周年記念エディション／ユニバーサル ミュージック 価格（3,960円税込）

発行日　2024年8月31日
編集長　西村公孝
デザイン　鈴木信輔（ボールド）
発　行　朝日ウッドテック株式会社

cue 12

【cue（キュー）＝手掛かり、きっかけ】

ロックサウンドに欠かせないベースギター

Rickenbacker 4001
リッケンバッカー4001

ビートルズで一躍有名に

リッケンバッカー社は1931年にアメリカ合衆国カルフォルニア州で設立された楽器メーカーです。設立から暫くはハワイアンミュージックで使われているラップスティールギターが主力商品でしたが1960年代にビートルズのジョン・レノン、ジョージハリスン、ポール・マッカートニーが同社の製品を使用した事でギブソン社やフェンダー社といった大手楽器メーカーの仲間入りをする事となりました。現在では数多いエレクトリックギターやベースを製造していますが、今回は今でも数多くのミュージシャンに支持されているエレクトリックベースのリッケンバッカー4001を取り上げていきます。

リッケンバッカー4001に使われている木材

通常エレクトリックベースは、ネックにメープル材、ボディにはアルダー材、又はアッシュ材を使う事が一般的ですがリッケンバッカーベースはネックだけでなくボディにもメープル材が使われているのです（指板はローズウッド材）。メープル材をマホガニー材と組み合わせてボディ材として使う例はありますがメープル単体をボディ材として使っている例はリッケンバッカーベース以外ほとんど存在しません。メープルネックとメープルボディのコンビネーションこそがリッケンバッカーベース独特の硬くて芯の太い音を可能にしているのです。

リッケンバッカー4001の愛用者

ポール・マッカートニーはビートルズ時代はバイオリンベース（cue No.1参照下さい）をメインで使っていました。昨年公開されたビートルズのレコーディグ風景を中心に構成された映画「ゲットバック」では重低音に乏しいバイオリンベースに替えてリッケンバッカー社から贈呈されたばかりのこの4001ベースを使うようにプロデューサーから助言されていましたがポールマッカートニーは「重たい・スイッチが多くて複雑」との理由で拒否している場面が捉えられていました。しかし解散後のウイングス時代は、このベースをメインにレコーディングやライブをおこなっているのです。ビートルズに比べて、よりロック色の強いサウンドを目指していたからこその選択だったのかもしれませんね。またクリス・スクワイア（イエス）、ジョン・エントウィッスル（ザ・フー）、ロジャー・グローバー（ディープ・パープル）等もリッケンバッカーベース4001独特の硬質なベースサウンドを上手く駆使した音作りに拘っています。こうして見ると、過去のcue No.2やNo.4で取り上げたフェンダー社のジャズベース、プレシジョンベースがオールマイティな音楽に対応出来るのに対してリッケンバッカーベースはその個性的な音の特徴や独特のシェイプからロック系のミュージシャンに多く愛用されているのがわかります。

（文・相原）

ポール・マッカートニー（Wikipediaより）